

大人のありそうもない話に対する幼児の反応

富田 昌平*・半崎 優花**

Preschooler's reaction to an adult's improbable talks

Shohei TOMITA and Yuka HANZAKI

要 旨

本研究では、大人からありそうもない話を聞かされた時の幼児の反応とその発達的变化を明らかにすることを目的とした。調査者（若い女性）は、幼稚園の年少児、年中児、年長児との何気ない遊びや会話の中で、「実は100歳なんだ」（調査1）または「実は空が飛べるんだ」（調査2）と発言し、その時の幼児の反応を観察し記録した。幼児の反応は、5つの主要なカテゴリー（真に受ける、困惑する、驚く、疑う、笑う）と「困惑する」カテゴリーに含まれる7つの下位カテゴリー（固まる、微笑む、聞き流す、戸惑う、首を傾げる、舌を出す、話題を変える）に分けられた。その結果、年少児では真に受けたり困惑したりする反応が多く見られ、年中児ではそれらに加えて驚いたり疑ったりする反応がよく見られるようになった。年長児になると疑う反応が増加し、笑う反応も見られるようになった。また年中児では、複数の反応の組み合わせのパリエーションが最も多く見られ、信じ込みと疑いとの間で揺れ動いていることがうかがえた。以上の結果は、大人のありそうもない話に対する幼児の実践的な反応の発達過程と、現実か虚構か、真実か嘘かという二分法を超えた幼児の反応の多様性という観点から考察された。

キーワード：ありそうもない話、空想、嘘、冗談、幼児

問題と目的

人間は現実にはありそうもないような不思議な話が好きである。漫画家の藤子・F・不二雄（1997）は、「人間は皆、日常性から飛躍した不思議の話が好きなんだと断定している」（p.7）と述べた上で、自分の体験から大きくかけ離れた不思議な出来事を追体験したいという衝動は、人間の一般的な傾向として時代を超えてあったのではないかと指摘し、世界中に伝わる民話や伝承の類について言及している。そして、人間は誰も不思議な話を聞きたいという欲求を持っているが、それをまるっきりの絵空事ではなく、身近な自分のまわりで起きたとしてもおかしくない現実感を持って聞きたい、ありそうもない話をありそうに聞きたいのだと考察している。

非現実的なありそうもない事柄を好む傾向は、最近の実験でも確認されている。Subbotsky（2009）は、4、6、9歳児と大人を対象に、通常の結果（例えば、箱の中に切手を入れて閉じた後、魔法の杖を振り、もう1度

箱を開けると切手がそのままある）と魔術的な結果（例えば、箱の中に切手を入れて閉じた後、魔法の杖を振って、「切手よ、消えろ」と言って箱を開けると、切手が消えている）を見せた後、もしも報酬としてもらった切手（大人の場合は運転免許証など）で自ら実践して試すとしたらどちらを選ぶかを尋ねた。その結果、子どもも大人も、たとえ犠牲（切手が消失する）を払ったとしても、通常の可能性よりも魔術的な可能性を試す方を好んで選択することが示された。また、Kim & Harris（2014）は、3～6歳児を対象に、通常の結果を生じさせる情報提供者（例えば、コップを手を使って持ち上げる）と魔術的な結果を生じさせる情報提供者（例えば、コップを手で触れずに持ち上げる）を見せた後、両者が互いに異なる主張をするのを聞かせ、どちらの主張を信頼し支持するかを求めた。その結果、子どもは通常の方を好んで選択することが示された。いずれの研究でも、参加者は通常の方と魔術的な方とを区別し、魔術的な方の方が現実には起こりえないことを

* 三重大学教育学部

** 無所属（三重大学教育学部第64期卒業生）

理解していた。にもかかわらず、通常の事柄よりも魔術的な事柄の方を好んで選択したのはなぜなのであるか。

Subbotsky (2010) は、魔術的な現象の理解と魔術的な可能性への好奇心は別物であると指摘している。ゆえに、通常と魔術とを区別し、魔術を現実存在しない力と理解したうえで、抑えようのない好奇心から魔術的な結果の方を選択したのである。そして、人々が魔術的な可能性に対して好奇心を持ち、それに好んで接近しようとするのは、それが滅多に観測されず、真実かどうかの確かな証拠を持ち得ないためであり、解明が困難でいつまでも真新しいからこそ、人々の好奇心を絶えず刺激するのだという。人々がありそうもない話を聞きたがる理由もまた、恐らくこれと同じであると思われる。

ありそうもない話をありそうに聞いて楽しむためには、そもそもその話の内容が日常の現実から逸脱していて、現実には滅多にないか、あるいは不可能であることを、話を聞く側が理解している必要がある。逆に言うと、そうしたありそうもない（すなわち、空想的な）事柄とありそうな（すなわち、現実的な）事柄の区別がついていない段階では、どのような話もありそうに聞こえるため、驚いたり不思議がったり怖がったりすることもなく、楽しむこともできないであろう。このことは、空想と現実との区別が未発達である年少児（3-4歳児）は、手品を見せたとしてもそれを驚いたり不思議がったり怖がったりをあまりしなかったという富田（2009）の結果からも示唆される。

では、ありそうもない話をありそうに聞いて楽しめるようになるのは、いつ頃からなのであるか。先行研究では、ふりと現実、見かけと本当、想像と現実など存在論的区別の発達に関する研究はこれまで数多く行われてきたが、そうした数多くの区別のうち、この問題と最も深くかかわるのは、恐らく空想と現実の区別と嘘と真実の区別であろう。空想と現実の区別に関する研究では、子どもは5歳頃になると、絵本に描かれた様々な存在や出来事を空想か現実かで適切に区別できるようになることが示されている（e.g., Samuels & Taylor, 1994; Sharon & Woolley, 2004; Taylor & Howell, 1973; 富田・原, 2006）。つまり、作り話か本当の話かの区別は5歳頃からつくようになるのである。他方、嘘と真実に関する研究でも同様に、子どもは5歳頃になると、相手がついた嘘を真に受けるのではなく、疑うことができるようになることが示されている（e.g., Lee, Cameron, Doucette, & Talwar, 2002; 上宮・仲, 2009）。例えば、割れたグラスの原因として、「絵本からお化けが飛び出してきて、グラスを割ったんだ」と主張した女性の話を、3, 4歳児はそのまま真に受けたが、5歳児

は嘘ではないかと疑った。以上から、ありそうもない話をありそうに聞いて楽しむための認知的基盤は、5歳頃に成熟すると考えられる。

しかし、実際にありそうもない話を聞かされた時、上記のような認知的基盤を十分に持つ子どもならば誰でも、それを楽しむようになるのかと言えば、もちろんそうではないであろう。そのような話を聞かされた時の子どもの実践的な態度や行動は、実に様々であることが予想される。

保育や子育ての場では、ある意味では大人と子どもとの親しい関係の中での遊戯的なコミュニケーションの1つとして、大人が子どもに現実にはありそうもない話を聞かせ、やりとりを楽しむということがしばしば行われている（e.g., 岩附, 2004; 河崎, 1994, 1997; 加用, 1990, 2015）。例えば、加用（1990）は、4歳の息子と一緒に風呂に入った時、わざと「この子、どこの子？知らない子やあ？」「知らん人やあ」と言い続けた。すると、4歳の子どもはあまりのことに驚き怒って抵抗を続けるも、ついには泣き出したそうである。しかし、同じ子どもが5歳の時に、もう一度同じことをしたところ、今度は平気な顔をして「あんなこそ、どこの人やあ？知らん人やあ」と言い返したそうである。

また、加用（1990）は、ある家庭での話として、次のような事例も紹介している。6歳の息子に夕食時に「どうしてお母さんは、いつもそう、ご飯の時、早くしなさいとか、いっぱい食べなさいとか言うの？いつも言ってるよ！」と言われた母親。一瞬考えた後に、「あのね、よく聞いて。お母さん、実は、今まで黙ってたんだけど、あのね、本当はね、お母さんはね、あなたたちの本当のお母さんじゃないの！」「私はね、本当はね……、狼男なのよ！」「あなたたちのお母さんは、私が食べちゃったのよ！あなたたちも、早くご飯をいっぱい食べさせて、早く大きくさせて、食べちゃうつもりなのよ！早く食べなさい！」と言った。すると、息子は絶句。驚いてたじろぎながらも、「じゃあ、じゃあ、早くなってみろよ！狼男になってみろよ！」と言うと、「何を言ってるの？狼男はねえ、満月の夜だけに変身するのよ。そんなことも知らなかったの？…早く食べなさい！」と母親。その後、母親はそんなやりとりがあったことはすっかり忘れていたが、息子は時々思い出して、「お母さん、ほんまになれんのか？あれ、ほんまか？なれんのか？」と聞いてきたそうである。さらに数日たったある日の朝、「お母さん、僕な、夕べ見とったで！」「あんな、ゆうべな、満月の夜やっただ。お母さん、何も変わらへんかったやんか！僕、見とったで！」と息子。母親は、「ああ、そんなことがあったなあ」と思い出しつつ、「昨日は忘れとったわ！」と言い返したそうである。

いずれの事例も、恐らく、大人と子どもとの親しい関係の中でこそ生じたものであり、その背景には、子どもにありそうもない話をありそうに聞かせ、その反応をもとにやりとりしながら、互いにくだらなくも楽しいひとときを過ごそうという大人の側の遊戯的な意図が感じられる。大人が子どもを可愛がり、遊びたがる(麻生, 2016) からこそ、こうした事例は生じると考えられる。

そして、これらの事例から改めて気付かされることは、ありそうもない話をありそうに聞いて楽しむということは、単に空想と現実の区別や嘘と真実の区別に関する認識的基盤が子どもの中で成熟すれば可能になる、という単純な話ではないということである。先に述べたように、こうした話を聞かされた時の子どもの反応は、実に多様であることが予想される。にもかかわらず、これまでの研究の多くは、実験室的場面の中で子どもに言語的判断を要求する課題を提示し、そこで見られた回答を空想か現実か、嘘か真実かの二分法で分類することによって、子どもの理解度を把握することを行っていた。そうではなく、何気ない遊びや会話など日常実践的場面の中で、子どもが大人からありそうもない話を聞かされた時、空想か現実か、嘘か真実かの二分法を超えて、どのような実践的な態度・行動を示すのか、それについて調べた研究は、著者が知る限り見当たらない。従って、この点について調べることは、子どもが現実(または真実)とは何か、空想(または嘘)とは何かについての結論的な考えに到達するまでに、どのように両者の間を揺れ動くのかについて、示唆を与えてくれると考えられる。また、揺れ動くことの意味や揺れ動きを促す大人のありそうもない話の意味についても、重要な示唆を与えてくれるのではなかろうか。

そこで本研究では、大人からありそうもない話を聞かされた時、幼児期の子どもが示す実践的な態度や行動とその発達の変化を明らかにすることを目的とする。具体的には、幼稚園の年少児(3-4歳児)、年中児(4-5歳児)、年長児(5-6歳児)を対象に、何気ない遊びや会話という日常実践的場面において、大人が簡単なありそうもない話(「実は100歳なんだ」「実は空が飛べるんだ」)を言って聞かせ、その時の反応を事例的に記録する。先行研究の知見を踏まえると、仮説的には、子どもは幼児期の前期(3-4歳頃)、大人のありそうもない話に対して単に真に受けたり、困惑したりする反応を多く示すが、幼児期中期(4-5歳頃)になると、次第にその発言を現実性の観点から評価できるようになり、驚いたり、疑ったりする反応を示すようになることが予想される。さらに幼児期の後期(5-6歳頃)になると、その発言を嘘ではなく冗談として受

け止め、笑い飛ばしたりする反応も見られるようになることが予想される。一方で、それらは多様に示される反応の中で見られる大まかな発達の流れであり、発達の過程においては、反応が単一のものとして現れるのではなく複数の反応の組み合わせとして現れたり、1つの反応に収束するのではなく多様な反応へと拡がりを見せたりしながら、発達していくことが予想される。本研究では、各々の反応をていねいに描くことによって、子どもが揺れ動きながらどのように発達するのかを明らかにすることも目的とする。

調査 1

方法

対象児： 三重県内の幼稚園年少児 19 名(男児 10 名, 女児 9 名; 平均年齢 4 歳 2 ヶ月, 年齢範囲 3 歳 9 ヶ月~4 歳 5 ヶ月), 年中児 21 名(男児 10 名, 女児 11 名; 平均年齢 5 歳 0 ヶ月, 年齢範囲 4 歳 8 ヶ月~5 歳 6 ヶ月), 年長児 22 名(男児 10 名, 女児 12 名; 平均年齢 5 歳 11 ヶ月, 年齢範囲 5 歳 6 ヶ月~6 歳 7 ヶ月)を対象とした。

手続き： 調査者(第 2 著者)は幼稚園での自由遊び時間中の対象児の遊びや会話に参加し、遊び相手や話し相手として自然にかかわりながら、次の発言を行った。「先生、実は 100 歳なんだ」。この発言の内容は、現実にはありそうもない話(22 歳の若い女性が 100 歳であるはずがない)であるが、調査者はこの発言をあたかも真実であるかのような口調で、ごく自然に語ることを心掛けた。調査者による発言は、概して、まず調査者が対象児の年齢を尋ね(「○○ちゃんは今、何歳?」)、次に調査者の年齢について予想するように求め(「先生は今、何歳だと思う?」)、そして対象児が何らかの回答をした後に行った。その後の対象児とのやりとりは状況に応じて柔軟に対応したが、基本的には発言が真実であるという立場を貫くようにした。

調査者は対象児とのやりとりを IC レコーダーで記録し、やりとりの終了後、その時の発言や表情、態度や行動などをすぐにメモ書きし、その日の午後に事例として記述した。対象児の注意が逸れることを避けるために、IC レコーダーによる記録は隠れて行い、やりとりの最中にはメモ書きをしないようにした。なお、調査者は幼稚園教諭免許状取得のために必要な全ての実習を調査時点で終えており、幼児とかかわることには慣れていて、調査協力園にも過去 3 年間に観察や実習、ボランティアで何度も訪問し、「お姉ちゃん先生」として認知されていた。

対象児とのやりとりはできるだけ 1 名ずつ行うように心がけたが、やむを得ず 2 名以上と同時にやりとり

した場合には、そこに調査者の発言を聞くのが2度目である者が含まれないように留意した。

なお、調査にあたっては、園長、副園長、担任教諭に事前に説明を行い、了解を得た上で実施した。また、本調査ではその性質上、対象児に誤った情報を伝えることになるため、それによって対象児にネガティブな結果をもたらされないように、調査後も対象児の観察を行い、担任教諭への聞き取りも行うなど、フォローアップに留意した。結果的に、調査者の発言に対して継続的に戸惑いの様子を示す子どもは皆無であった。

結果と考察

発言前後の子どもとのやりとりに関する事例の件数は、年少児15件、年中児20件、年長児15件であり、事例に参加した子どもの実数としては、年少児19名、年中児21名、年長児22名であった。この事例件数と参加児数の差異は、複数名に対して同時に発言を聞かせるケースがいくつか存在したことによるものであり、具体的には、年少児で2名同時2件、4名同時1件、年中児で2名同時1件、年長児で2名同時5件、3名同時1件であった。なお、先に述べたように、本調査ではやむを得ず2名以上と同時にやりとりをした場合には、そこに調査者の発言を聞くのが2度目である者が含まれないように留意したが、年少児で1名だけそれに該当する者がいた。しかし、その該当する男児は調査者の発言に対して2度ともほぼ無反応であるような「受け流す」反応をしており、2度目の他児(3名)への影響もほとんどないと考えられた。よって、この男児の反応に関しては1度目の事例の反応のみを分析対象とした。

子どもの反応は、発言や表情、態度、行動をもとに、①真に受ける、②困惑する(a. 固まる, b. 微笑む, c. 聞き流す, d. 戸惑う, e. 首を傾げる, f. 舌を出す, g. 話題を変える)、③驚く、④疑う、⑤笑う、という5つの主要カテゴリーと、②困惑するに含まれる7つの下位カテゴリーに分けられた。1名の子どもによる反応は、いずれか1つのカテゴリーに排他的に分類されるわけではなく、場合によっては複数のカテゴリーに分類された。各カテゴリーの定義と具体例については後述する。なお、この他にも大人の発言を年齢当てゲームとして捉え、その回答結果に反発したかのような反応を示した子どもが各年齢で1名(計3名)確認された(例:「100って言ったならよかったなあ」、「100歳でしょ! (と怒ったように言いながら去っていく)」、「え? 100歳? 僕言ったで、(最初に)手を挙げてはい! って」)。これらの反応は、大人の発言を現実性の観点からどう受け止めたかという本調査の趣旨から外れるため、以下の分析からは除外した。よって、分析対象と

なったのは、年少児18名、年中児20名、年長児21名である。Figure 1は各カテゴリーの年齢別の出現率を示したものであり、Table 1は困惑反応の下位カテゴリーの年齢別の出現度数、Table 2は各カテゴリーの組み合わせの年齢別の出現度数を示したものである。

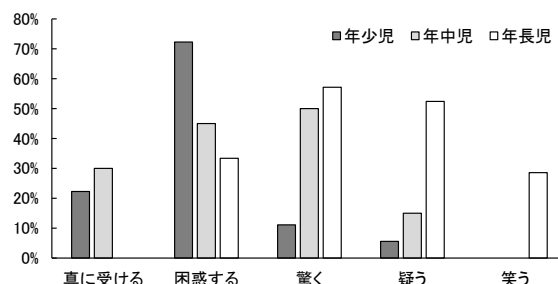


Figure 1 100歳発言における各反応カテゴリーの年齢別の出現率

Table 1 100歳発言における「困惑する」反応の下位カテゴリーの年齢別の出現度数 (%)

	年少児	年中児	年長児
	13	9	7
固まる	7 (54)	1 (11)	3 (43)
微笑む	5 (38)	3 (33)	2 (29)
聞き流す	0 (0)	2 (22)	1 (14)
戸惑う	1 (8)	2 (22)	0 (0)
首を傾げる	1 (8)	1 (11)	0 (0)
舌を出す	0 (0)	1 (11)	0 (0)
話題を変える	4 (31)	0 (0)	1 (14)

Table 2 100歳発言における各反応カテゴリーの組み合わせの年齢別の出現度数 (%)

	年少児	年中児	年長児
	18	20	21
真に受ける	3 (17)	0 (0)	0 (0)
驚く+真に受ける	1 (6)	6 (30)	0 (0)
固まる	4 (22)	1 (5)	3 (14)
微笑む	3 (17)	2 (10)	2 (10)
聞き流す	0 (0)	2 (10)	1 (5)
戸惑う	1 (6)	1 (5)	0 (0)
首を傾げる	0 (0)	1 (5)	0 (0)
固まる+話題を変える	3 (17)	0 (0)	0 (0)
微笑む+舌を出す	0 (0)	1 (5)	0 (0)
微笑む+話題を変える	1 (6)	0 (0)	0 (0)
微笑む+首を傾げる	1 (6)	0 (0)	0 (0)
驚く	0 (0)	2 (10)	3 (14)
驚く+戸惑う	0 (0)	1 (5)	0 (0)
驚く+話題を変える	0 (0)	0 (0)	1 (5)
疑う	0 (0)	2 (10)	2 (10)
驚く+疑う	1 (6)	1 (5)	3 (14)
疑う+笑う	0 (0)	0 (0)	1 (5)
驚く+疑う+笑う	0 (0)	0 (0)	5 (24)
バリエーション数	9	11	9

なお、分析の信頼性を保証するために、発言ごとに約25%にあたる事例(各年齢5件、合計15件)に関し

て、調査の目的や仮説を知らない学部生 1 名に、独立して評定を求めた。その結果、評定者間一致率として $\kappa = .82$ という比較的高い信頼性の値が得られた。評定者間で一致しなかった箇所については協議の上決定した。また、残りの事例に関しては第 1 著者が単独で評定を行った。以下では、カテゴリーごとに結果と考察を述べる。

真に受ける：「真に受ける」カテゴリーには、調査者の発言に対してそれを否定するでもなく受け入れ、その話題に関するやりとりをそのまま続けた場合が含まれた。以下にその具体例を示す（カッコ内は調査者による補足。また、例えば 4；3 という表記は、4 歳 3 か月の略である。以下同）。

<p>真に受ける</p> <p>【事例 5】「へー…。少し間を置いて、「R ちゃん、4 歳になったら(次は)5 歳やで」。^[4;3, 女児]</p> <p>【事例 7】「ふーん。少し間を置いて、「りくくん(弟)はさ、今 2 歳」。その後、Y の家族の誕生日の話に。^[4;3, 女児]</p> <p>【事例 12】少し間を置いて、「じゃあ、じゃあ、4 歳とかのケーキだと(ロウソクを立てることが)できるが、それはできひん」。^[4;6, 男児]</p> <p>驚く+真に受ける</p> <p>【事例 33】「あらー！100 歳？」。(調査者:「うん。M 君のお母さんとお父さんは何歳?」。「お母さんは知つとる。71 かな」。(調査者:「お母さん 71 歳なんや?」。「そう!」。(調査者:「じゃあ、おばあちゃんは知つとる?」。「ななじゅう…。53 歳かな」。(調査者:「53 歳かあ。じゃあ、先生より若いなあ」。「うん」。^[5;3, 男児]</p> <p>【事例 40】「えー！K ちゃんまだまだ」と言った後、友達の誕生日の話から家族の誕生日の話になり、「その次はパパの誕生日」と言う。(調査者:「パパは何歳なん?」。「めっちゃ大きいけど、大人」。(調査者:「大人って何歳ぐらいかな?」。「大人?めっちゃ大きいけど、何歳かわからへん」。^[4;11, 女児]</p>

こうした反応は、年少児で 4 名 (22%)、年中児で 6 名 (30%) 確認されたのに対して、年長児では全く確認されなかった。また、年少児では 4 名中 3 名が単に真に受ける反応を示したのに対し、年中児では 6 名全てが驚いた上で真に受ける反応を示すなど、年齢間でも違いが見られた。つまり、大人の発言を聞いて一度は感情的な高ぶりを示したという点で、年中児は年少児とは異なっていた。彼らは年少児とは異なり、調査者の発言内容を日常的なものではなく、滅多に遭遇することのない驚異的なものとして受け止めたのかもしれない。

困惑する：「困惑する」カテゴリーには、調査者の発言を直接否定はしないものの、その話題に関してそれ以上やりとりを続けるわけでもなく、暗に話題の続行を避けるかのような様子を示した場合が含まれた。

これらの多くは表情や態度など非言語的反応に基づくため、Table 1 に示すように、さらに 7 つの下位カテゴリーとして設定した。「a. 固まる」は、文字通り表情や動きが止まったかのような様子を示した場合であり、「b. 微笑む」は、調査者に対して単に微笑み返した場合である。「c. 聞き流す」は、その発言がまるでなかったかのように、それまでの遊びを続けた場合であり、「d. 戸惑う」は、怪訝そうな、または不思議そうな表情を浮かべた場合である。「e. 首を傾げる」は、文字通り首を傾げた場合であり、「f. 舌を出す」は、舌を出すしぐさを示した場合である。「g. 話題を変える」は、その話題を続けることを嫌うかのように、急に別の話題を始めた場合である。以下にその具体例を示す。

<p>固まる</p> <p>【事例 2】抱いている人形をじっと見つめる(100 歳発言を受ける前に、「この子(人形)は今 3 歳」と言っていた)。^[3;10, 男児]</p> <p>固まる+話題を変える</p> <p>【事例 13】「100 歳…」と呟く。少し固まった後、遊びの話をし始める。^[3;8, 女児]</p> <p>微笑む+首を傾げる</p> <p>【事例 11】「100 歳？」と、ニコニコしながら首を傾げる。^[4;5, 女児]</p> <p>聞き流す</p> <p>【事例 27】表情も変わらず、遊びを続ける。^[5;0, 男児]</p> <p>戸惑う</p> <p>【事例 9】「100 歳？」(調査者:「100 歳やで」) 不思議そうな顔をする。^[4;5, 女児]</p> <p>微笑む+舌を出す</p> <p>【事例 36】ペロッと舌を出して、ニコニコしながら去っていく。^[5;5, 女児]</p>
--

こうした反応は、年少児で 13 名 (72%) 確認されたのに対して、年中児では 9 名 (45%)、年長児では 7 名 (33%) と減少した。Table 1 の下位カテゴリーに注目すると、「固まる」と「微笑む」が多く見られたが、どの反応も満遍なく確認された。この困惑反応は、感情的な高ぶりという点では、後述する驚き反応と比べて明らかに静かで穏やかなものであり、彼らは調査者の発言内容を日常的なものとして捉えてよいのか、あるいは感情を強く表すべき驚異的なものと捉えるべきなのか、判断につきかねているようであった。困惑反応に含まれる下位カテゴリーの多様性が、そうした揺れ動きをよく表している。

驚く：「驚く」カテゴリーには、大声を上げる、口を手を当てる、目を見開くなど、調査者の発言に対して明らかに驚いた様子を示した場合が含まれた。以下にその具体例を示す。

驚く

【事例 25】「えっ！」と、調査者に顔を向け、驚いた顔をした後、すぐに遊びに戻る。[4;10, 男児]

【事例 38】口に手を当てて、「えー！」。[5;7, 女児]

【事例 45】その場でジャンプしながら、「えー！」。[5;11, 男児]

驚く+戸惑う

【事例 8】一瞬驚いた顔をした後、「うん。…うん」。[4;4, 男児]

驚く+話題を変える

【事例 8】「ええ！」と言った後、自身の制作物について話をし始める。[6;2, 男児]

こうした反応は、年少児の2名(11%)に対して、年中児では10名(50%)、年長児では12名(57%)と増加した。先述のように、年少児では驚きを伴わない真に受ける反応と困惑反応が多く観測されており、これらはいずれも静かで穏やかなものであった。これに対して驚き反応は強い感情的な高ぶりを示すものであり、年中児になると少なくとも半数の子どもが、調査者の発言に含まれる驚異的性質に気づき始めていることがうかがえる。

疑う：「疑う」カテゴリーには、否定的な発言や反論をするなど、調査者の発言の現実性に対して懐疑的な様子を示した場合が含まれた。以下にその具体例を示す。

疑う

【事例 26】「100?」。(調査者:「うん、100歳」)。「これで100?」。(調査者:「うん」)。「全然100歳には見えへんわ!」と言って走り去った後、立ち止まって、「全然100歳には見えへんわ!」ともう一度叫ぶ。[5;0, 男児]

驚く+疑う

【事例 8】目を丸くして、「えー!100歳ってもう死んだるで!」[4;4, 男児]

【事例 37】「100歳!?」。(調査者:「100歳」)。「100歳ってもう死んでるよ?」。(調査者:「先生まだ生きとるよ」)。「100歳?」。(調査者:「そやねん」)。「うちのお父さんとお母さんより上…」。(中略)「っていうか、おばさんっぽくない!」。[5;6, 男児]

【事例 43】「え?えー?100歳じゃないでしょ!」。(調査者:「100歳じゃない?」)。「うん」。(調査者:「なんで?」)。「だって、100歳は年寄りだもん!」。[5;10, 女児]

こうした反応は、年少児の1名(6%)、年中児の3名(15%)に対して、年長児では11名(52%)と増加した。また、年中児と年長児を比較すると、年中児では驚き反応と疑い反応との組み合わせは1名のみであったのに対して、年長児では8名と多く見られた。このことは、年中児と年長児では驚きの質に違いがあり、年長児になると、若い女性という調査者の外見に対して、

100歳発言がいかにか不釣り合いで驚異的であるかに気づいていることが考えられる。彼らの何人かは、「100歳」は「年寄り」であり、多くの場合、「もう死んでいる」年齢だと主張した。

笑う：「笑う」カテゴリーには、調査者の発言を真に受けるのではなく冗談として笑い飛ばすような様子を示した場合が含まれた。以下にその具体例を示す。

疑う+笑う

【事例 46】笑いながら、「うそつき。100歳やったら、もうおばさんになっとるやん!」。[6;2, 女児]

驚く+疑う+笑う

【事例 41】笑いながら、「え!100歳じゃないやん!嘘!100歳やったらおばあちゃんになっとるんだよ!」。(調査者:「先生は違うかな?」)。「うん!100歳やったらおばあちゃんだよ!」。[5;9, 男児]

【事例 54】「えー!」と言って、ケラケラ笑う。「普通のやつは?」。(調査者:「普通のやつ?」)。「普通のやつ!」。(調査者:「本当はってこと?」)。「うん!本当はー?22歳?」。[5;11, 女児]

【事例 62】「えー!嘘やろ?嘘や!」と笑う。(調査者:「嘘やと思う?」)。「うん!だって100歳でこんなに若いと思う?」。(調査者:「ああ、100歳はもとおばあちゃん?」)。「うん!これくらい小さいで!」と言って、手を広げて100歳の背丈を表現する。[5;11, 女児]

こうした反応は、年少児と年中児では全く見られず、年長児でのみ6名(29%)ほど確認された。いずれも、疑う反応との組み合わせで生じていた。先述のように、年長児になると調査者の発言に対して疑いの目を向けるようになるが、笑いを伴わない疑い反応の場合、時に怒りの感情が含まれていた。調査者が恐らく、自分をまだ年齢に関して正しく推論できない未熟者だと見なしたであろうことへの怒りである。他方、少数ではあるが年長児でのみ見られた笑いを伴う疑い反応では、そうした感情は含まれておらず、彼らが調査者の発言を、怒りを誘う「悪意のある嘘」ではなく、笑いを誘う「愉快な冗談」として捉えるようになったことを示唆していると考えられる。

反応のバリエーション数：各年齢での反応の組み合わせのバリエーション数に注目すると、Table 2の最下段に示すように、年少児と年長児ではそれぞれ9種類であったのに対し、年中児では12種類と最も多く見られた。これらはほんのわずかな差に過ぎないが、年中児は他の年齢と比べて、空想か現実か、嘘か真実かの間でより揺れ動いているのかもしれない。

結論と課題：まとめると、年少児では、調査者の発言に対して、それを真実として受け止めたり、あるいは、それが真実なのかどうかかわからず困惑したりする反応が多く見られた。彼らの多くは「100歳」という年

年齢の大きさを実感できていないようであった。そのことは、年中児や年長児と比べて、驚き反応がほとんど見られなかったことからもうかがえる。他方、年中児では、驚き反応が多く見られ、真に受ける場合にもいったんは驚きを示すなど、「100歳」という年齢の大きさを覚えることはできているようであった。同時に、「100歳」の大きさを感知し、驚きは示すものの、調査者の発言を現実性や真実性の観点から評価し、疑いを持つことはまだ困難なようであった。年長児では、引き続き困惑や驚きの反応は見られるものの、真に受ける反応は見られなくなり、驚き反応が見られる場合でも、疑いや笑いを伴って生じるケースが多く見られた。「100歳」の大きさを感知し、驚いたうえで、実際には若い女性（22歳）である調査者の現実と発言とのズレに意識を向け、調査者の発言を疑ったり、あるいはそれを冗談として受け止めて笑い飛ばしたりする反応が見られた。特に、笑いに関しては、この時期に、大人のありそうもない話を悪意のある「嘘」として捉えるのではなく、愉快的な「冗談」として捉え始めていることがうかがえた。

しかし、本調査で取り上げた100歳発言は、幼児期の子どもにとって現実性や真実性の観点から認識するには困難過ぎたのかもしれない。例えば、中島（2010）は、4歳児は人間が成長に伴い身体サイズを大きく変化させていくことを理解している一方で、老化に伴い毛髪や皺の量が増えることは理解しておらず、それは5歳以降に発達することを明らかにしている。また、富田・石川（2014）は、5-6歳児でさえも、成人期から老年期の大人の年齢を正しく推論することが困難であることを明らかにしている。従って、本研究においても、特に年少の子どもほど、100歳という年齢が目目の若い女性の年齢としてどれほど不釣り合いで驚異的な数字であるかを理解できなかった可能性が考えられる。

実際、100歳発言に至るまでに、「先生は今、何歳だと思う？」と尋ねられた52名（年少児17名、年中児18名、年長児17名）のうち、何らかの年齢を回答できた者は20名（38%）に過ぎず、残り32名（62%）は「わからない」と回答した。また、回答した者のうち、18歳から22歳の範囲で回答できた者は4名（8%）のみであり、その他の内訳は18歳未満が8名（15%）、23歳以上40歳未満が3名（6%）、40歳以上60歳未満が2名（4%）、60歳以上が3名（6%）であった。最少は3歳、最大は90歳であった。このように、本調査の参加児の多くが調査者の実際の年齢を正しく推定できておらず、その意味では、100歳という年齢は彼らの多くにとってあり得ない事柄として受け止められていなかった可能性が考えられる。

そこで調査2では、年少児であってもすでに十分な

知識を有していると考えられる事柄、すなわち、人間の飛行能力について取り上げる。人間は鳥のように空を飛ぶことができないことへの理解は、3歳児でもすでに見られることが先行研究（Boerger, 2011）でも示されている。従って、調査2では、調査者は子どもに対して、人間の飛行能力に関するありそうもない話の発言（「先生、実は空が飛べるんだ」）を行う。それにより、十分な知識を有している事柄に関するありそうもない話を聞かされた場合でも、調査1と同様の反応パターンが示されるかどうかを検討する。

調査2

方法

対象児： 幼稚園年少児20名（男児10名、女児10名；平均年齢4歳2ヶ月、年齢範囲3歳8ヶ月～4歳7ヶ月）、年中児19名（男児9名、女児10名；平均年齢5歳1ヶ月、年齢範囲4歳8ヶ月～5歳7ヶ月）、年長児19名（男児10名、女児9名；平均年齢5歳11ヶ月、年齢範囲5歳8ヶ月～6歳6ヶ月）を対象とした。このうち年少児19名、年中児10名、年長児10名は研究1にも参加していた。年少児に重複が多いのは、本調査の協力園が年少児1クラス、年中児2クラス、年長児2クラスで編成されていたことによる。調査1と2との実施間隔は1～2週間程度であった。

手続き： 調査者（第2著者）は調査1と同様に、幼稚園での自由遊び時間中の対象児の遊びや会話に参加し、遊び相手や話し相手として自然にかかわりながら、次の発言を行った。「先生、実は空を飛べるんだ（飛んだことがあるんだ）」。対象児とのやりとりにおいては、まず調査者が対象児に空を飛んだ経験について尋ね（「○○ちゃんはこれまで空を飛んだことがある？」）、「ない」と回答した場合、次に先述の飛行発言を行った。また、「ある」と回答した場合には、「どうやって？」とその内容について尋ねた。これは、本当に鳥のように空を飛んだ経験と、単にジャンプして少しだけ宙に浮いた経験、及び飛行機に乗って空を飛んだ経験を区別するためのものである。もしも対象児が後者の意味で「空を飛んだ」と回答していることが確認された場合、「鳥みたいに空を飛んだことはある？」と再度質問を行った。この質問に対して何らかの回答が得られた後に、先述の飛行発言を行った。その後の対象児とのやりとりは状況に応じて柔軟に対応したが、基本的には発言が真実であるという立場を貫くようにした。記録方法や実施にあたって配慮した点については、研究1と同様である。

結果と考察

発言前後の子どもとのやりとりをまとめたエピソードの件数は、年少児 18 件、年中児 19 件、年長児 18 件であり、実数としては、年少児 20 名、年中児 19 名、年長児 19 名であった。これらは複数名に対して同時に発言を聞かせるケースがいくつか存在したためであり、具体的には、年少児で 2 名同時 2 件、年長児で 2 名同時 1 件であった。

子どもの反応は、調査 1 と同様に、5 つの主要カテゴリー（①真に受ける、②困惑する、③驚く、④疑う、⑤笑う）と、②困惑するに含まれる 7 つの下位カテゴリー（a. 固まる、b. 微笑む、c. 聞き流す、d. 怪訝そうにする、e. 首を傾げる、f. 舌を出す、g. 話題を変える）とに分けられた。1 名の子どもによる反応は、いずれか 1 つのカテゴリーに排他的に分類されるわけではなく、場合によっては複数のカテゴリーに分類された。Figure 2 は各カテゴリーの年齢別の出現度数を示したものであり、Table 3 は困惑反応の下位カテゴリーの年齢別の出現度数、Table 4 は各カテゴリーの組み合わせの年齢別の出現度数を示したものである。

なお、調査 1 と同様に、分析の信頼性を保証するために、発言ごとに約 25% にあたる事例（各年齢 5 件、合計 15 件）に関して、調査の目的や仮説を知らない学部生 1 名に、独立して評定を求めた。その結果、評定者間一致率として $\kappa=0.83$ という比較的高い信頼性の値が得られた。評定者間で一致しなかった箇所については協議の上決定した。また、残りの事例に関しては第 1 著者が単独で評定を行った。

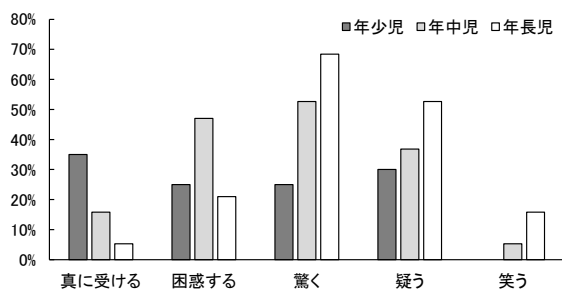


Figure 2 飛行発言における各反応カテゴリーの年齢別の出現率

Table 3 飛行発言における「困惑する」反応の下位カテゴリーの年齢別の出現度数 (%)

	年少児	年中児	年長児
	5	9	4
固まる	0 (0)	0 (0)	0 (0)
微笑む	0 (0)	5 (56)	0 (0)
聞き流す	4 (80)	2 (22)	0 (0)
戸惑う	0 (0)	1 (11)	1 (25)
首を傾げる	0 (0)	0 (0)	0 (0)
舌を出す	0 (0)	0 (0)	1 (25)
話題を変える	1 (20)	1 (11)	2 (50)

Table 4 飛行発言における各反応カテゴリーの組み合わせの年齢別の出現度数 (%)

	年少児	年中児	年長児
	20	19	19
真に受ける	6 (30)	0 (0)	1 (5)
驚く+真に受ける	1 (5)	2 (11)	0 (0)
微笑む+真に受ける	0 (0)	1 (5)	0 (0)
微笑む	0 (0)	3 (16)	0 (0)
聞き流す	4 (20)	2 (11)	0 (0)
戸惑う	0 (0)	1 (5)	0 (0)
舌を出す	0 (0)	0 (0)	1 (5)
話題を変える	1 (5)	0 (0)	0 (0)
驚く	2 (10)	1 (5)	4 (21)
驚く+戸惑う	0 (0)	0 (0)	1 (5)
驚く+話題を変える	0 (0)	1 (5)	2 (11)
驚く+微笑む	0 (0)	1 (5)	0 (0)
疑う	4 (20)	2 (11)	2 (11)
驚く+疑う	2 (10)	4 (21)	5 (26)
疑う+笑う	0 (0)	0 (0)	2 (11)
驚く+疑う+笑う	0 (0)	1 (5)	1 (5)
バリエーション数	7	11	9

カテゴリーごとの詳細を述べる前に、まず、彼らが人間の飛行能力の可能性について、どの程度正しい知識を有しているかを明らかにする。本研究では、飛行発言に至るまでに、55 名の子ども（年少児 20 名、年中児 16 名、年長児 19 名）に「これまでに空を飛んだことがある？」と尋ねた。その後の「鳥みたいに空を飛んだことはある？」という補足質問も含めて、これらの質問に対して「ない」と正しく回答できた子どもは、年少児 15 名 (75%)、年中児 14 名 (88%)、年長児 18 名 (95%) であった。残る 8 名のうち 6 名（年少児 3 名、年中児 2 名、年長児 1 名）は「ある」と回答し続け、2 名（年少児）は、調査者による飛行発言を受けて、飛んだことが「ない」から「ある」へと回答を変更した。このことから、大部分の子どもは人間の飛行能力の可能性を正しく理解できていることが示された。

真に受ける：「真に受ける」カテゴリーの具体例は以下の通りである。

真に受ける

【事例 52】「僕もあるー！」。(調査者：「A 君も飛んだことあるの？どうやって飛んだん？」)。ニコニコしながら、「わからーん」。
[3;9, 男児]

【事例 66】間髪入れずに、「え、でもさ！Kは飛べへんの！Kはこれぐらいしか〜」と、自分の顔の前に手を持ってきて高さを表す。
[4;7, 男児]

【事例 92】「僕も飛んでみたい！」。
[5;10, 男児]

驚く+真に受ける

【事例 63】「すごい！」。(調査者：「H 君は飛べる？」)。「H 君は大きくなったけどね、遊んでるしかね、飛べないんだよ」。(調査者：「遊びやったら飛べるんや！」)。「あのね、夢だったら飛べるんだよ」。
[4;6, 男児]

【事例 80】ニコニコしながら、「え！どこで？」。(調査者:「みんなが幼稚園お休みの時に、ここのお空飛んだん」)。「やりたいなあ！」。[5;2, 女児]

こうした反応は、調査 1 と同様に、年少児で 7 名 (35%) と最も多く、年中児では 3 名 (16%)、年長児では 1 名 (5%) と減少した。また、年少児では 7 名中 6 名が単に真に受ける反応を示したのに対して、年中児と年長児ではそうした反応は 4 名中 1 名に過ぎず、残りは驚いた後に真に受ける反応を示したり (2 名)、微笑んだ後に真に受ける反応を示したりした (1 名)。このように、同じ真に受ける反応を示した場合でも、年齢間で質的な違いが見られた点は、調査 1 と同様であった。

困惑する：「困惑する」カテゴリーの具体例は以下の通りである。

聞き流す

【事例 59】「へえ～、どこで？」。(調査者:園庭を指して、「ここのお空飛んだん」)。「ふーん」。[4;3, 女児]

【事例 69】遊んでいた手を一瞬止めるが、またすぐに遊び出す。[4;4, 女児]

微笑む

【事例 81】困ったような笑みを浮かべながらも、ずっとニコニコしている。[5;2, 女児]

戸惑う

【事例 86】チラッと筆者を見て、その後大量にお茶を飲む。[5;6, 男児]

舌を出す

【事例 95】下をペロッと出して立ち去る。[5;11, 女児]

こうした反応は、年中児で最も多い 9 名 (47%) が確認され、年少児では 5 名 (25%)、年長児では 4 名 (21%) であった。調査 1 との比較で言えば、年中児と年長児では違いがなかったのに対して、年少児では大きく減少した (72%→25%)。Table 3 の下位カテゴリーに注目すると、調査 1 で多く見られた「固まる」は消失し、代わりに「聞き流す」が多く見られたが、全体的に反応自体のバリエーションが減少した。困惑反応は、調査 1 の考察から、調査者の発言内容を日常的と捉えるか驚異的と捉えるか判断がつきかねている様子であると考えられるが、本調査の飛行発言では、特に年少児においてそうした姿が減少したことがうかがえる。

驚く：「驚く」カテゴリーの具体例は以下の通りである。

驚く

【事例 76】「えっ！」と、驚いている様子。[4;10, 女児]

【事例 95】「…なにで？」。(調査者:手をパタパタしながら、「鳥さんみたいに、こうやって」)。驚いた顔をする。[5;11, 男児]

驚く+微笑む

【事例 82】「えっ！」と叫んで、笑顔で走り去っていく。[5;1, 男

児]

驚く+戸惑う

【事例 97】「そうなの?!」。(調査者:「うん、羽が伸びてきて飛べたの」)。黙って遠くを見つめる。[6;0, 男児]

驚く+話題を変える

【事例 98】「なんで？」。(調査者:「ずっと飛びたいなと思って、思いっきりジャンプしてみたら飛べたの」)。しばらく間を置いて、他の話をし始める。[6;0, 女児]

こうした反応は、年少児の 5 名 (28%) に対して、年中児では 10 名 (50%)、年長児では 12 名 (57%) と増加した。これらは調査 1 と同様であり、調査者のありそうもない話の発言に対して感情的な高ぶりを示すようになるのは、主に年中児からであると言える。しかし、調査 1 と比べると、驚き反応と後述の疑い反応は年少児でも比較的多く見られた。100 歳発言と比べて飛行発言は、子どもにとってより十分な知識を持つ分野であったことから、現実との違いに気づき、違和感を表明しやすかったのかもしれない。一方で、年中児と年長児では、困惑反応との組み合わせが多く見られており、すでに知識があるがゆえに、調査者がなぜそのような発言をしたのか、真意を測りかね、反応が多様化したのかもしれない。

疑う：「疑う」カテゴリーの具体例は以下の通りである。

疑う

【事例 61】「どこ？」。(調査者:「幼稚園のお空飛んだん」)。「なんで？」。(調査者:「ずっと飛びたいなって思ったら、魔法をかけてもらって飛べたの」)。「魔法をかけてもらっても飛べないよ?」。(調査者:「飛べない?なんで?」)。「魔法ってさ、ドレスとかさ、おばさんとかになるんだよ」。(調査者:「そうなん?でも、お空飛べる魔法もあるんだよ」)。「ないんだよー」。[4;5, 女児]

【事例 77】「どうやって飛べるの?」(調査者:「鳥さんみたいに飛びたいなって思ってた、思いっきりジャンプしたら飛べたの」)。「嘘でしょ?」。(調査者:「嘘やと思う?」)。「そんな人いないよー!」。[4;11, 男児]

驚く+疑う

【事例 68】「えっ! それで怪我した?」。(調査者:「怪我はしなかった。ピューンって飛べたよ、鳥さんみたいに」)。「どこまで行っちゃった?」。(調査者:「もうわからんぐらい遠いところまで行っちゃった」)。「じゃあ飛んでみなさーい!」。(調査者:「もう飛べへんねん」)。「なんで?」。(調査者:「なんでやるな?わからへん」)。「それ夢じゃないの?」[4;6, 男児]

【事例 99】「え、飛べんの?」。(調査者:「うん」)。「え、なにで?」。(調査者:「鳥さんみたいに」)。「鳥さんみたいに?どうやって?」。(調査者:「魔法かけたら…」)。「え?魔女なん?」[6;0, 男児]

こうした反応は、年少児の 6 名 (30%)、年中児の 5 名 (26%) に対して、年長児では 8 名 (42%) と若干で

はあるが増加した。しかし、調査1と比べると、年少児(6%→30%)、年中児(15%→26%)ともに割合が増加しており、すでに知識があることで、調査者の発言に含まれる驚異的性質に気づきやすく、違和感を表明しやすかった可能性が考えられる。疑いを示した子どもの多くは、「いつ?」「どこで?」「どうやって?」と調査者を激しく追及した。調査者が魔法に言及すると、その魔法を否定し、それでも飛べると言い張ると、「ならば飛んで見せろ」と応酬した。彼らの追及の激しさは、恐らく「人間は鳥のように飛べない」という信念の安定性によってもたらされており、その意味では、年齢に関する知識が不確かであった調査1の100歳発言と比べると、追及の手はより激しかったと言える。

笑う：「笑う」カテゴリーの具体例は以下の通りである。

疑う+笑う

【事例 93】少し間を置いて、不思議そうに「飛べたの?」。(調査者:「うん、そうなん」)。ニコツとして、「誰と飛んだの?」。(調査者:「先生1人で飛んだん。誰にも見られたらあかんからさ」)。「じゃあ、飛んでみて!」。(調査者:「いや、今みんなおでさ、みんな見てるところでは飛べへんねん」)。少し離れたところに調査者を引っ張って行き、「誰もいないで、飛んでみて!」。(調査者:「Nちゃんにも、見られたらあかんねん」)。手で目を塞いで、「なんで?こうしてるから!」。(調査者:「ちょっと見てるやん!」)。ニコニコしながら、「なんでー!見たいー!」。^[5;10, 女児]

【事例 104】笑いながら、「じゃあ飛んでみて、今!」。(調査者:「今は飛べへんの」)。「なんでー?」。(調査者:「みんなが見てるどころでは飛べへんねん」)。(中略)笑いながら、「やってよー!」。(調査者:「Kちゃんは飛べる?」)。「飛べやん」。(調査者:「そっか。先生は?飛べると思う?」)。笑いながら、「飛べやん!」。^[6;2, 女児]

驚く+疑う+笑う

【事例 87】「え、どこ?!」。(調査者:園庭の上空を指さして、「ここ。みんなが幼稚園お休みのときに飛んだん」)。フツと笑って、「ほんとに?」。(調査者:「本当」)。「なにで?」。(調査者:「鳥さんみたいにこうやって飛んだん」)。「自分で?」。(中略)ニコニコしながら、「じゃあ飛んでみい」。^[5;6, 女児]

こうした反応は、年長児の3名(16%)と年中児の1名(5%)でのみ見られた。このことは、調査1と同様に、年長になるに従って、調査者の発言を「嘘」ではなく「冗談」として受けとめることが少しずつ可能になることを示唆していると考えられる。一方で、調査1と比べると、「笑う」反応の割合は少なかった。この点に関しては、100歳発言と比べて飛行発言は、子どもにとってより十分な知識を持つ内容である分、人間が鳥のように飛べないことはあまりにも自明であり、「嘘」ではなく「冗談」として受けとめたもののそれは「笑えな

い冗談」となっていたのかもしれない。

また、2つの調査の終了後もフォローアップのため、しばらく観察を続けたところ、調査者(第2著者)が100歳であることをからかったり、笑い飛ばしたりする事例が4件(7名)ほど確認された。以下にそのうちの2つを紹介する。

【事例 106】Y:「この人100歳なんだよー!(笑)」。U:「知ってるよ」。Y:「100歳なんですよー?(笑)」。(調査者:「そやで!今100歳やねん」)。U:「今100歳だから、その次は101歳?」。(調査者:「うん。先生、お誕生日6月やから、来年の6月で101歳になる」)。Y:爆笑。U:「じゃあ、その次は102歳で、その次は103歳で…」。^[Y:5;7, 女児, U:5;6, 男児]

【事例 109】M:「この人100歳なんだよー!(笑)」。A・R・H:「うそだよー!」「絶対100歳に見えないー!」。R:「あのね、空も飛べるって言ってた!絶対うそだよー!(笑)」。H:「Hちゃんにも言ってたよ!」。(調査者:「え、みんなは飛べへんの?」)。全員:「飛べないー!(笑)」。(調査者:「そっか、残念やなあ。先生は飛べるねん」)。全員:「絶対うそー!(爆笑)」。^[M:5;7, A:5;11, R:5;11, H:6;0, いずれも女児]

興味深いことに、これらは全て年長児であり、年少児や年中児ではこうした事例は見られなかった。あくまでも逸話的な事例に過ぎないが、年長児になると、大人のありそうもない話を冗談として受け止め、それを大人や仲間とともに笑い合うということが少しずつ可能になることを改めて示唆していると言えよう。

反応のバリエーション数：各年齢での反応の組み合わせのバリエーション数に注目すると、Table 4の最下段に示すように、年少児7種類、年長児9種類に対して、年中児11種類であり、調査1と同様に、年中児で最も多く見られた。

結論：まとめると、調査2では、「真に受ける」反応は年少児に最も多く、その後減少し、代わりに年中児からは「驚く」反応が増加すること、そして、年長児になると「疑う」反応が増加し、「笑う」反応も見られるようになることが示された。また、「困惑する」反応は年齢を通じて見られたものの、年少児と年中児・年長児との間では、質的な違いが見られた。こうした年齢ごとの反応パターンは、程度の差こそあれ、調査1とほぼ同様であった。

総合考察

本研究の目的は、大人からありそうもない話を聞かされた時の幼児の反応とその発達的变化について明らかにすることであった。2つの調査において、幼稚園の年少児、年中児、年長児を対象に、実験室的場面ではなく何気ない遊び・会話など日常実践的場面で大人によるありそうもない話(100歳発言と飛行発言)を聞かせ、

その時の発言や表情、態度、行動などを記録し分析した。以下では、大人のありそうもない話に対する幼児の反応の発達過程と多様性について論じたうえで、その場での幼児の反応に影響を及ぼす可能性が考えられるいくつかの要因について考察する。そのうえで、本研究の限界と今後の課題について述べる。

まず、本研究では、100歳発言と飛行発言という2つの異なるありそうもない話を子どもに提示し、その反応を観察し記録したが、両発言ともに、程度の差はあるものの、年齢ごとの反応パターンは共通していた。年少児では、単純に真に受ける反応や困惑する反応が多く見られ、年中児では、そこに驚きの要素が加わり、疑う反応も見られるようになり、年長児になると、疑う反応がさらに増加し、加えて笑う反応も見られるようになることが示された。これらの結果は、本研究の発達仮説を支持するものであると言える。

従来の研究では、3、4歳頃の子どもは空想と現実や嘘と真実とがまだ未分化であるため、外部からの未知の情報をそのまま信じ易い傾向にあるが、5歳頃になるとそれらが分化し、外部からの情報に対してもその内容に応じて懐疑的に評価できるようになることが示されている (e.g., Woolley & Ghossainy, 2013)。従って、本研究の結果もまた、大まかにはそうした結果を再現するものであった。従来の研究では、多くの場合、実験室的場面で明らかにされてきたこれらの結果に対して、本研究では日常実践的場面で明らかにしたという点に意義があると言える。

しかし、本研究では2つの調査を通じて、笑う反応は年少児と年中児にはほとんど見られず、年長児においてのみ確認されたが、その割合は100歳発言で29%、飛行発言で16%に過ぎなかった。その意味では、こうした発達仮説を十分に支持する結果が得られたとは言えなかった。従って、今後の研究では、この発達仮説の妥当性をさらに検証するために、児童期以降、特に7、8歳の子どもを含めて検討する必要がある。

また、実験室的場面を採用した従来の研究では、空想か現実か、嘘か真実かという二分法での言語的判断を幼児に求めることがほとんどであり、その結果、発達は単に一方から他方への置き換えとして描かれることが多かった。しかし、本研究では日常実践的場面を採用して幼児に自由な反応を求めることにより、これまでの研究では見られなかったような困惑や驚き、笑いなどの感情的要素を含んだ多様な反応を捉えることができた。具体的には、幼児の反応は5つの主要カテゴリーと7つの下位カテゴリーという多様な反応系によって捉えることができた。また、各反応も単一的に捉えるのではなく複合的に捉えることによって、年齢間の質的な違いも明確にすることができた。例えば、

100歳発言において、真に受ける反応は年少児と年中児で同程度観測されたが、後者は驚き反応との複合であるという点で、前者の反応とは異なっていた。また、年中児の驚き反応は、多くの場合、真に受ける反応や困惑する反応との複合であったのに対して、年長児では疑う反応との複合によって示された。このように日常実践的場面で大人が現実でありそうもない話をした時、幼児がそれをどのように受け止め、どう反応するのか、その反応の多様性を捉え、それぞれの異なる意味を考察できた点で、本研究は従来の研究に新たな証拠を追加できたと言える。

次に、幼児の反応に影響を及ぼすと考えられるいくつかの要因について述べる。本研究では、調査1で100歳発言を行った後、調査2では飛行発言を行ったが、これは、前者の発言では年齢に関する十分な知識がなかったため、その発言の驚異的性質に気づくことが困難であり、ゆえに、現実性や真実性の認識の観点にもとづく反応があまり見られなかった可能性が考えられたからである。そこで調査2では、幼児でも既有知識を持つ飛行発言を行った結果、年少児や年中児における驚きや疑いの反応は増加した。このことは、調査1では「人間は100歳になると、顔の皺も増え、髪も白くなる」という既有知識を持たないために、100歳発言の驚異的性質に気づくことができず、驚きや疑いの反応が少なかった年少児・年中児が、調査2では「人間は空を飛ぶことができない」という既有知識を持っているがゆえに、飛行発言の驚異的性質に気づき、そうした反応を示すことができたことを示唆している。つまり、幼児の実践的な反応には、その分野に関する既有知識が影響を及ぼす可能性が考えられる。

一方で、調査2では、現実性や真実性についての認識の土台をもとにしながら、相手の発言を冗談として受け止め、ともに笑い合うといった反応の増加はあまり示されなかった。むしろ年長児において、笑う反応は29% (調査1) から16% (調査2) へと減少した。これはなぜなのであろうか。考えられる理由として、「実は空が飛べるんだ」という飛行発言自体が、すでにその発言の現実性を十分に認識している年長児にとって、笑えるほどにユーモアのある発言になっていなかった可能性が考えられる。幼児の笑いについて研究している友定 (1993) は、おかしきとは対象と対象とのズレによって生じ、そのおかしきへの気づきによって笑いが生じると述べている。この時、そのズレの大きさ、すなわち、対象間の意味的な距離の大きさがほどよくコントロールされている場合に、その笑いはより大きくなるという。つまり、本研究の場合、すでに「人間は空を飛ぶことができない」という知識があり、そこに「実は空が飛べるんだ」という調査者の発言が投げ入れられ

たことで子どもの中でズレが生じたわけであるが、そのズレがほどよくコントロールされているとは感じられず、過度に飛躍していると感じられたため、笑うに笑えなかった可能性が考えられる。相手の発言に含まれるユーモア的要素に、聞く側が気づき面白さを感じ取ることができるかどうかも重要なかもしれない。

もう1つ考えられることとして、会話のフレームが挙げられる。例えば、Principe & Smith (2008) は、歯の妖精についての信念が様々である5-6歳児を対象に、一番最近に歯が抜けた時の記憶を語るよう求めたところ、事前に愉快な話が好きだと聞かされていた調査者に対しては、架空の装飾をふんだんに施した内容の語り（例えば、歯の妖精がいかに窓枠に魔法の粉を落とし、いかに部屋の中を飛び回ったか）をすることが多かったのに対して、事前に真面目な話が好きだと聞かされていた調査者に対しては、装飾を排除した現実的な内容の語り（例えば、寝る前に抜けた歯を箱に入れておくと、翌朝にはコインが入っていた）をすることが多かったことを明らかにしている。Principe & Smith は、会話文脈に埋め込まれた要求の志向性によって、子どもの語りは真実フレームにも遊びフレームにもどちらにも滑り込む可能性があることを示唆している。本研究の場合では、人間が空を飛ぶ可能性について会話した時、多くの子どもはそれが不可能であると明確に認識していたため、遊びフレームよりも現実について真面目に語り合う真実フレームで会話をしており、ゆえに笑う反応がほとんど示されなかった可能性も考えられる。つまり、会話の志向性を聞く側がどう認知するかによって、その場での幼児の反応も左右されるのかもしれない。

以上から考えると、大人のありそうもない話に対する幼児の反応も、必ずしも発言を冗談として受け止め、それを楽しむようになることが、発達の最終到達点というわけではなさそうである。現実性や真実性の認識、そして、その分野に関する既有知識を前提としながら、さらに子どもは相手の発言の中にあるユーモア的要素を吟味したり、相手との会話の志向性を吟味したりしながら、最終的にそれを冗談として受け止めたとしても、それに楽しさを見出してノリよく応えるかどうかは、また別問題として反応を選択していくのかもしれない。この点については、今後さらなる研究の蓄積が必要であろう。

最後に、今後の課題について述べる。第1に、本研究では、実験室的場面ではなく日常実践的場面でデータの採集を行った結果、子どもの自然な反応を多く引き出した一方で、1度に複数の子どもを対象としたり、同じ子どもに短期間で複数の発言を仕掛けたり、知識に関する質問をすべての対象児に実施できていないな

ど、厳密さに欠ける側面があった。今後はより厳密に組織的にデータを採集する必要がある。第2に、本研究では関連する要因として発言内容に関する既有知識を取り上げたが、同様に関連が予想される空想と現実の区別能力や嘘の見破り能力については検討しなかった。今後はこれらの関連性を探ることも重要であろう。第3に、本研究の結果から、発言内容に含まれるユーモアの要素や会話文脈に埋め込まれた要求の志向性なども、子どもの反応に影響を及ぼす可能性が考察された。今後はこれらの可能性についても、対象とする年齢の幅を広げながら検討する必要がある。

文 献

- 麻生 武.(2016). 子どもの発達とファンタジー：消えつつある“ファンタジーの世界”. 増山 均・汐見稔幸・加藤 理 (編). ファンタジーとアニメーション (pp.85-112). 東京：童心社.
- Boerger, E. A. (2011). “In fairy tales fairies can disappear”: Children's reasoning about the characteristics of humans and fantasy figures. *British Journal of Developmental Psychology*, *29*, 3, 635-655.
- 藤子・F・不二雄.(1997). 藤子・F・不二雄の世界. 東京：小学館.
- 岩附啓子.(2004). シナリオのない保育. 東京：ひとなる書房.
- 河崎道夫.(1994). あそびのひみつ. 東京：ひとなる書房.
- 河崎道夫.(1997). 発達を見る目を豊かに. 東京：ひとなる書房.
- 加用文男.(1990). 子ども心と秋の空. 東京：ひとなる書房.
- 加用文男.(2015). 「遊びの保育」の必須アイテム. 東京：ひとなる書房.
- Kim, S., & Harris, P. L. (2014). Belief in magic predicts children's selective trust in informants. *Journal of Cognition and Development*, *15*, 181-196.
- Lee, K., Cameron, C. A., Doucette, J., & Talwar, V. (2002). Phantoms and fabrications: Young children's detection of implausible lies. *Child Development*, *73*, 1688-1702.
- 中島伸子.(2010). 年をとるとなぜ皺や白髪が増えるの？：老年期特有の身体外観上の加齢変化についての幼児の理解. *発達心理学研究*, *21*, 95-105.
- Principe, G. F., & Smith, E. (2008). The tooth, the whole tooth and nothing but the tooth: How belief in the Tooth Fairy can engender false memories. *Applied Cognitive Psychology*, *22*, 625-642.
- Samuels, A., & Taylor, M. (1994). Children's ability to distinguish fantasy events from real-life events. *British*

- Journal of Developmental Psychology*, **12**, 417–427.
- Sharon, T., & Woolley, J. D. (2004). Do monsters dream? Young children's understanding of the fantasy/reality distinction. *British Journal of Developmental Psychology*, **22**, 293–310.
- Subbotsky, E. (2009). Curiosity and exploratory behavior toward possible and impossible events in children and adults. *British Journal of Psychology*, **101**, 481–501.
- Subbotsky, E. (2010). *Magic and the mind: Mechanisms, functions, and development of the magical thinking and behavior*. New York: Oxford University Press.
- Taylor, B., & Howell, R. J. (1973). The ability of three-, four- and five-year-old children to distinguish fantasy from reality. *Journal of Genetic Psychology*, **122**, 315–318.
- 富田昌平. (2009). 幼児期における不思議を楽しむ心の発達：手品に対する反応の分析から. *発達心理学研究*, **20(1)**, 86–95.
- 富田昌平・原充代. (2006). 幼児における空想／現実の区別の認識. *幼年教育研究年報*, **28**, 51–59.
- 富田昌平・石川早紀. (2014). 幼児は年齢をどのように理解しているのか? *心理科学*, **35**, 40–52.
- 友定啓子. (1993). *幼児の笑いと発達*. 東京：勁草書房.
- 上宮愛・仲真紀子. (2009). 幼児による嘘と真実の概念理解と嘘をつく行為. *発達心理学研究*, **20**, 393–405.
- Woolley, J. D. & Ghossainy, M. (2013). Revisiting the fantasy-reality distinction: Children as naïve skeptics. *Child Development*, **84**, 1491–1495.

付 記

本論文は、半崎（旧姓：北川）優花による三重大学教育学部 2015 年度卒業論文で得られたデータを再分析し、新たに論を展開したものです。調査にご協力いただいた幼稚園の先生方及び幼児の皆さんに深く感謝申し上げます。